

Feuillets d'art (フウィエ・ダール)

Paris : [s.n.] , 1919—1922

本誌は1919年5月から1922年8/9月まで発行された、文学、演劇、美術、音楽、モードといった広い意味での芸術全般に関する雑誌である (1ere annee: Composes et choisis par Edmond Moussie et Michel Dufet)。誌名のfeuillets (葉の意) のとおり、二つ折り、または四つ折りの紙を重ねて、章ごとに章題を入れた二つ折りの紙で巻いただけの綴じない、帙入りの雑誌である。各号とも85—88ページで、奥付によると予約購読制とある。モードのプレート入りは版の号によって多少の差異があるものの、1100—1500部発行された。

分野ごとに分かれた各章ではいずれも主にそれぞれの時事的テーマを取り上げている。例えば、美術の章の第1号ではプティ・パレで最近開かれた展覧会にちなんでゴヤ (Goya) を、第2号では同じプティ・パレの展覧会にちなんでシャッセリオウ (Chassériau) を、また第6号では死後400年を記念してラファエロ (Raffaello) を、といった具合であり、当時新進であったキュビズムのピカソ (Picasso) も取り上げられている。文学の章では、アナトール・フランス (Anatole France)、アンリ・ド・レニエ (Henri de Régnier)、ポール・クロードル (Paul Claudel) など当時の前衛的作家の作品が紹介されており、同時代のほかの雑誌に比べると決して贅沢な造本ではないものの、知的で進歩的な教養のある読者層を対象としていたことが想像される。

モードの章ではカット入りの記事のほかに、2、3葉のプレートが添えられ、いずれもジャポン紙、ないしはオランダ紙に刷られ、多くはボショワール、なかには木版のものもある。バルピエ (George Barbier)、マルタン (Charles Martin)、ベニト (Eduarde de Benit)、ドリアン (Etienne Drian) など、当時一流のイラストレーターのほかにタブロー画家ヴァン・ドンゲン (Kees van Dongen) の作品に、例えば「ガゼット・デュ・ボン・トン (Gazette du bon ton)」等にもみられる華やかさも冴えもうかがえないのは第一次世界大戦直後の造本の質素さのせいだろう。本誌では、ドリアンのような20年当時まだ新人の作品の方が若々しい魅力を放っている。また第3号から加わる広告の章には、画家の名は明らかではないものの、本体のプレートをしのぐイラストも含まれており、広告美術の時代の到来を思わせる。 (能澤慧子)

「文化女子大学図書館所蔵 続西洋服飾関係欧文献解題・目録」

より転載



6巻 (1920年) のモード画、ドリアン筆